

メルマガ読者の皆様は、川崎の「石敢當」(いしがんと)をご存じでしょうか。

「石敢當」はこの3字を刻んで厄除けとする石標で沖縄県や鹿児島県などに伝わります。

JR 川崎駅前(東口)に設置された石敢當の「由来書」などによると、「川崎市は、沖縄が1959年(昭和34年)の宮古島台風と1966年(昭和41年)の第2宮古島台風の際、甚大な被害を受けたことに対し、全市的な救援活動を展開し、その返礼として、宮古島特産の名石トラバーチンに石敢當を刻み贈られた」もので、『川崎市と沖縄を結ぶ友好親善と文化交流の絆として』石敢當を建てたとあります。この救援活動は川崎市議会が超党派で決議し、労働団体、婦人団体、文化団体、商工会議所、全市の町内会など、市民総ぐるみで大々的に運動が展開され、義援金は当時の金額で約360万円も寄せられたそうです。「石敢當」は川崎と沖縄との古くからの友好と強い心の通じ合いを語り伝えています。

このように川崎と結びつきの強い沖縄が、先月5月15日に本土復帰50年を迎えました。「5月15日」の頃は、NHKが特集番組を連続して放送したり、新聞各紙が特集記事を掲載するなど、「沖縄」について考える機会となりました。沖縄では、明治政府の「琉球処分」、太平洋戦争末期の沖縄戦、27年間の米国統治など悲惨な歴史が続き、本土復帰以降も、命を脅かされ尊厳を踏みにじられる事件や事故が今もなお発生しています。

天皇陛下は、記念式典でのお言葉の中で「沖縄には、今なお、様々な課題が残されています。今後、若い世代を含め、広く国民の沖縄に対する理解がさらに深まることを希望するとともに、今後とも、これまでの人々の思いと努力が確実に受け継がれ、豊かな未来が沖縄に築かれることを心から願っています」と沖縄への理解の深まりを希望されました。

神奈川新聞は、社説で共同通信の調査を紹介し、「復帰してよかったと思う」県民が9割を超える一方、その後の歩みには5割以上が「満足していない」と答えたとあります。

読売新聞では、飯塚恵子編集委員が「沖縄の歴史は日本の政治の“裏面史”のように感じる時がある」と述べ、その理由の一つに「大半の県外の人間に、沖縄の過酷な歴史がそもそもあまり知られていないこと」を指摘しています。

沖縄は貴重な自然、独特で優れた有形・無形の伝統文化など、豊かな観光資源に恵まれており、本土の人間が訪れる機会が多い訳ですが、観光と併せて、沖縄の過酷な歴史、現状等について理解を深める機会とするべきなのでしょう。

今日、日本を取り巻く安全保障環境は厳しさを増していますが、単純に沖縄の現状を当然視するのではなく、基地負担の軽減等について国民全体の課題として考える必要性を感じます。そのためにも、私たちは「沖縄」に関心を持ち続けることを大切にしなければなりませんし、併せて、戦争の悲惨さと平和の尊さを常に忘れてはならないと思います。

さて、このメルマガ・コラムを通じて3年間にわたり様々な話題を取り上げさせていただきましたが、私からのメッセージは今回が最後となりました。

これまでお読みくださいますようお願いありがとうございました。(N.W)